絵仏師良秀

要旨

絵仏師の良秀は、家が火災に遭ったとき、妻子をも顧みず、燃え上がる火を眺めていた。人々が不審がると、自分にとっては、これで不動尊の火炎の描き方が分かったことこそが財産だと言って、他は全く顧みずに平然としていた。そのことの後、良秀の不動尊の絵の評価が高まった。

構成

段落	ページ・行	段意
第一段	初め〜P二〇・5〈つらに立てり。〉	絵仏師良秀の隣家から出火したとき、良秀は、妻子などが家の中にいるのも構わず、逃げ出た道路に立って、燃え上がる火の手を見ていた。
第二段	P二〇・6〈見れば〉〜P二一・2〈立てりけれ。〉	火は既に良秀の家に移ったのに、良秀はただそれを眺めていた。人々が驚きあきれていると、不動尊の火炎の描き方がこれで分かった、絵仏師としてはこの発見こそが財産なのだと言って、不審がる人々をあざ笑った。
第三段	P二一・3〈その後にや〉〜終わり	そのことがあって後、良秀の不動尊を描いた絵の評判が高くなった。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①これ（代・係助・同類）も（係助・区別）今（副）は（係助・区別）昔、絵仏師良秀（格助・引用）と（格助・引用）いふ（八四・体）あり（ラ変・用）けり（過・終）。

②家（格助・体修）の（格助・起点）隣より、火（力変・用）出でき（接助・単接）て、風（接助・単接）おしおほひ（八四・用）て、せめ（マ下二・用）けれ（過・已）ば、逃げ出で（ダ下二・用）て、大路へ（格助・方向）出で（ダ下二・用）に（完・用）けり。③人（格助・主格）の（格助・体修）書か（四・未）する（使・体）仏（係助・列挙）も（サ変・用（尊）語り手→仏）おはし（過・終）けり。④また、衣着（カ上一・未）ぬ（打・体）妻子（副助・例示）など（係助・列挙）も、さながら（副）内（格助・場所）に（ラ変・用）あり（過・終）けり。⑤それ（代）も（係助・同類）知ら（ラ四・未）ず、ただ（副）逃げ出で（ダ下二・用）たる（完・体）を（格助・対象）こと（格助・資格）に（サ変・用）し（接助・単接）て、向かひ（格助・場所）の（格助・体修）つら（格助・場所）に（格助・場所）立て（タ四・已）り（存・終）。

⑥見れ（マ上一・已）ば、すでに（副）我が（格助・体修）家に（格助・場所）移り（ラ四・用）て、煙・炎、くゆり（ラ四・用）ける（過・体）まで、おほかた（副助・範囲）、向かひ（格助・体修）の（格助・体修）つら（格助・場所）に（格助・場所）立ち（タ四・用）て眺め（マ下二・用）けれ（過・已）ば、「あさましき（形シク・体）こと。」と（格助・引用）て、人ども（八四・用）来とぶらひ（過・已）けれ（接助・順偶）ど、騒が（ガ四・未）ず。⑦「いかに。」と（格助・引用）、人、言ひ（過・已）けれ（接助・順偶）ば、向かひ

①これも昔のことだが、絵仏師の良秀という者がいたということだ。②（ある日のこと、良秀の）家の隣から火事が起こって、風が上から吹きつけて、（火が）迫ってきたので、（良秀は、家から）逃げ出して、大路に出てしまった。③（家の中には、）人が（注文して）書かせている仏（の画像）もいらっしゃった。④また、（寝たときのままで）衣服を着ていない妻や子なども、そのまま中にいた。⑤（良秀は、）そんなことも気付かず、ただ（自分が）逃げ出したのをよいことに、（大路の）向こう側に立っていた。

⑥見ていると、（火は）すでに自分の家に移って、煙や炎がくすぶって（いってきたが、そうな）るまで、ほとんど全てを、向かい側に立って眺めていたので、「たいへんなことですね。」と言って、人々が見舞いに来たけれども、（良秀は）落ち着いていた。⑦「どうしたのですか。」と、人が言ったところ、（良秀は、家の）向かいに立って、家

に　立ち　て、　家　の　焼くる　を　見　て、
格助・場所　タ四・用　接助・単接　格助・主格　カ下二・体　格助・対象　マ上一・用　接助・単接

うちうなづき　て、　時々　笑ひ　けり。　⑧「あはれ、　し　つる　せうとく
カ四・用　接助・単接　副　八四・用　過・終　感　サ変・用　完・体

かな。　年ごろ　は、　わろく　書き　ける　もの　かな。」　と　言ふ　と
終助・詠嘆　副　係助・提示　形ク・用　カ四・用　過・体　終助・詠嘆　格助・引用　八四・体

き　に、　とぶらひ　に　来　たる　者ども、「こ　は　いかに、
格助・時間　格助・目的　カ変・用　完・体　代　係助・提示　副

かくて　は　立ち　たまへ　る　ぞ。　あさましき　こと
副　係助・区別　タ四・用　補動八四・已(尊)人々→良秀　存・体　係助・強意　形シク・体

かな。　物　の　つき　たまへ　る　か。」　と　言ひ　けれ
終助・詠嘆　格助・主格　カ四・用　補動八四・已(尊)人々→良秀　存・体　係助・疑問　格助・引用　八四・用　過・已

ば、「なんでふ、　物　の　つく　べき　ぞ。　年ごろ、　不動尊　の
接助・順偶　副　格助・主格　カ四・終　推・体　係助・強意　副　格助・体修

火炎　を　悪しく　書き　ける　なり。　今　見れ　ば、　かう　こそ
格助・対象　形シク・用　カ四・用　過・体　断・終　副　マ上一・已　接助・順偶　副(ウ音)　係助・強意(係)

燃え　けれ　と、　心得　つる　なり。　これ　こそ、　せうとく　よ。
ヤ下二・用　詠・已(結)　格助・引用　ア下二・用　完・体　断・終　代　係助・強意(係)　間助・呼掛

この　道　を　立て　て　世　に　あらん　に　は、
代　格助・対象　タ下二・用　接助・単接　格助・場所　ラ変・未　仮・体　格助・理由　係助・区別

仏　だに　よく　書き　たてまつら　ば、　百千　の　家　も
副助・類推　形ク・用　カ四・用　補動ラ四・未(謙)良秀→仏　接助・順仮　格助・体修　係助・同類

出で来　なん。　わ党たち　こそ、　させる　能　も　おはせ
カ変・用　強・未　推・終　代　係助・強意(係)　連　係助・同類　サ変・未(尊)良秀→人々

が焼けるのを見て、うなずいては、時々笑うのだった。⑧（そして、）「ああ、大変なもうけものをしたなあ。長い間、（自分は、不動尊の火炎を）下手に書いていたもんだなあ。」と言った（が、その）ときには、見舞いに来た人たちは、「これは、いったいどうして、このように立っていらっしゃるのですか。あきれたことですよ。何かが取りついておいでなのですか。」と言ったところ、（良秀は）「なんだって、何かが取りつくものか。長年、不動尊像の火炎を下手に書いていたのだよ。今（本物の火炎を）見ると、こんなふうに燃えるのだと、悟ったのだ。これこそが、（私にとっての）もうけものよ。この（仏画の）道を専門にして世にあるとしたら、仏様さえ上手にお書き申したならば、百でも千でも家は出来るだろう。おまえさんたちこそ、これといった才能もお持ちではないのだから、物なんかを借しみなさるがよい。」と言って、あざ笑いながら（そこに）立っていた。

ね　ば、　物（もの）　を　も　惜（を）しみ　たまへ。」　と　言（い）ひ
打・已　接助・順理　格助・対象　係助・強意　マ四・用　補動八四・已（結）（尊）良秀―人々　格助・引用　八四・用

て、　あざ笑（わら）ひ　て　こそ　立（た）て　り　けれ。
接助・単接　八四・用　接助・単接　係助・強意（係）　タ四・已　存・用　過・已（結）

⑨その　後（のち）　に　や、　良秀（りやうしう）　が　よぢり不動（ふどう）　とて、　今（いま）　に、
代　格助・体修　断・用　係助・疑問　格助・体修　格助・引用　格助・時間

人々（ひとびと）、　め　で　合（あ）へ　り。
八四・已　存・終

⑨その後のことであろうか、良秀のよじり不動と呼んで、（良秀の描いた不動尊の画像を）今でも、人々は皆褒めたたえている。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶絵仏師という仕事について説明する。
❷仏像・仏画について知っていることを発表し合う。知技(2)イ

❷生徒の興味を喚起する。資料集などを用いて画像を示してもよい。

【評価】古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶歴史的仮名遣いの読み方に注意して全文を音読する。（「古文を読むために1」を参照する）思判表B(1)ア
❷本文中で現代語にない語、現代語と意味の異なる語などを指摘して、その意味を古語辞典で調べ、確認する。（「古文を読むために2」を参照する）知技(1)ウ・(2)ウ
→**「言葉と表現」1**
❸現代語訳する。この話に登場する人物の心情とその変化を、順を追ってまとめる。知技(1)エ 思判表B(1)ア
→**「学習のポイント」1**
❹良秀が絵を描くことに対してどのような考えを持っているかまとめる。思判表B(1)イ

❶範読や斉読を複数回試みる。本文で歴史的仮名遣いに該当する箇所をチェックさせて、なめらかに読めるようになるまで繰り返す。

【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷「あさまし」「わろし」「悪し」など重要古語の意味を古語辞典で確認する。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。
・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸どのような感情から人々が見舞いに訪れたか、良秀の答えを聞

いて、人々の感情がどのように変化したか、順を追って整理させる。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

・人物の心情の変化について、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、授業中の指名やノート提出などにより、確認する。

❹良秀の発した言葉や行動について、なぜそのようにしたのかを順を追ってまとめ、考える。

【評価】 良秀の芸術への考え方について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、ノート提出などにより、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶絵を描くことに対する良秀の考え方についてどのように思うか話し合う。主態　→「言語活動」1

❷歴史的仮名遣いと内容について理解できたか、確認しながら音読する。知技(1)ア・(2)エ　思判表B(1)ア

読み方や文語のきまりについて理解し、古文に親しみ、学習課題に沿って、叙述を基に、絵を描くことについての絵仏師良秀の考え方について話し合っているか、分析する。

❷**【評価】** 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・時間の経過などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❶結末の一文を手掛かりに、芸術作品とそれを生み出した良秀の人間性について話し合う。芥川龍之介「地獄変」と読み比べをさせて良秀の人間性について解釈を深めさせてもよい。

【評価】 進んで説話のおもしろさを味わい、歴史的仮名遣いの

発問例と指導上の注意点

●二〇ページ

問 **「これも今は昔」（2行目）という冒頭句について述べた次の文の空欄を適切な語で補え。**

「これも今となってはもう（　①　）の（　②　）だが」の意。「これ」は、以下に語る一つの（　③　）全体を指す。一般に（　④　）系の物語に見られる慣用句である。末尾は、「となむ語り伝へたるとや」「となん」「とかや」などが用いられ、「（　⑤　）」と呼応する。

答 ①昔　②話　③説話　④説話　⑤今は昔

問 **「せめければ」（3行目）とは、何が何を「せめ」たのか。**

答 「火」が「良秀」（又は、人々）を。

問 **「人の書かする」（3行目）は、誰に「書か」せたか。**

答 良秀

問 **「人の書かする仏」（3行目）とは、何のことか。**

答 注文を受けて描いている、仏の画像のこと。

補 「書かする」が、描かせているの意であることに気付かせたうえで、「人の」の「の」が主格であることをつかませる。

問 **「おはしけり。」（4行目）と尊敬語が用い**

語句の研究

●二〇ページ

2これも今は昔　「これも」は、前の段を受けたもの。原典では、三十五話の「今は昔、…」を受けて、三十六～九話が「これも今は昔」になっている。「今は昔」は、説話の語り出しの定型で、これから語ることを不特定の過去の事柄とし、それを語り手の見聞という形で心理的に現在に引き寄せる起句である。「伊勢物語」の「昔、男ありけり。」から、「源氏物語」の「いづれの御時（おほんとき）にか、…」にも受け継がれ、「物語」の方法の基盤となった形式と言えよう。

「今となっては昔のことだが」と解されてきたが、馬淵和夫氏が、「今」を過去のある時に自分を置いた表現として、「これは昔のことだが」というように解すべきだと主張して、説得力あるものと評価されている。

2絵仏師　仏像の絵の制作を専門にする職業的な絵師。

2良秀　伝未詳。「十訓抄」では「絵仏師良秀といふ僧」とある。僧ならば「良秀」は「りょうしゅう」と読むのが適切である。

2風おしおほひて　風が覆いかぶさるように迫ってくる様子。「おし」は、上や横から強く圧力をかける意の動詞「押す」の連用形が接頭語として用いられたもの。なお、「十訓抄」（第六、三十五話）では、「家の隣より火出で来て、おしおほひければ」とあって、「火」が主語となっている。

3人の書かする仏もおはしけり　誰かが注文して書かせている仏画のこと。「おはし」は、「あり」「をり」の尊敬語「おはす」の連用形。「仏」に対する敬意を表す。

4さながら　副詞。①そのまま変わらず。②そっくり全部。ここは②。

5ことにして　「こと」は多義的であるが、ここでは火事から逃れたことをそれだけで十分なこととして、という意味でとらえたい。

5向かひのつら　「つら」は顔の側面を言うのが原義で、ここは、通りに面した側面のこと。

6くゆりけるまで　「くゆる」は、火が付いて煙が揺れ昇ること。また、その匂いが立つこと。

6おほかた　副詞。「総じて、およそ、全て」などの意。

られているのはなぜか。

答　主語が仏（の絵）であるから。

問「衣着ぬ妻子なども」（4行目）から、どんな様子が分かるか。

答　深夜、家族皆くつろいで、身支度を解いて寝ているときに、火事が起こった様子が分かる。良秀は、突然の火事の騒ぎに、慌てて家を飛び出したのである。

問「それも知らず」（4行目）の「知らず」の本文での意味を述べよ。

答　気付かず

問◉人々が「あさましきこと。」（7行目）と言ったのは、それぞれ、どのようなことに対してか。

答　「あさましきこと。」＝火事が起きて、良秀の家に燃え移ったこと。「いかに。」＝良秀が、自分の家が燃えているのに、平然としてそれを見ていること。

補　特に「あさましきこと。」について、「…として、人ども、来とぶらひけれど」に続いていることに注意する。

問「あはれ、しつるせうとくかな。」（9行目）について、

[1]　[易]「あはれ」の、ここでの適訳とその意味とを書け。

[2]　[中]「あはれ」は古語と現代語とでどのように意味が異なるか。

[3]　[難]A この言葉にうかがわれる良秀の心情を述べよ。

[中]B この言葉にうかがわれる良秀の心情を述べた次の文の空欄を適切な語で補え。

長年、納得のいく（　①　）を描けずにいたが、（　②　）を見て（　③　）の迫真性を感得した喜び。

答　[1] 訳＝ああ　意味＝嘆息する意。[2]（古）しみじみと感動する。（現）かわいそう。[3]A 我が家が燃える様子を見て、火炎の迫真性を悟り、大もうけをした喜びの気持ち。B ①火炎　②我が家の燃える様子　③火炎

問「わろく書きけるものかな。」（10行目）とあるが、何を「わろく書」いたのかが分かる部分を、後文から指摘せよ。

答　「年ごろ、不動尊の火炎を悪しく書きけるなり。」

補　具体的に言葉に出したところは、右の答えのようになるが、良秀が「わろく書きける」と言ったのは、「絵仏師」としての全体的な反省の言葉であろう。

なお、この「問」・「答」にある「わろし」「悪し」については、「語句の研究」に記したように、厳密に語義をとらえる指導の例としたい。

問「かくて」（11行目）はどのようなことを指

7あさましきこと　「あさまし」は「事の意外さに驚きあきれる」の意。「見下げる」の意の動詞「あさむ」の形容詞形だが、事の善悪いずれの場合にも用いられる。

7来とぶらひけれど　「とぶらふ」は①問い尋ねる。②訪れる。見舞う。③弔問する。ここは②。

9あはれ　感動詞。感動詞の「ああ」と「はれ」とが複合した語。事柄に対する強い感嘆の念を表し、さまざまな心情を表現する名詞・形容動詞に展開した。

9しつるせうとくかな　「し」はサ変動詞「す」の連用形、「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形、「しつる」で成し遂げたの意になる。「せうとく」は「所得（しょとく）」の転音と言われる。

10年ごろ　長年の間。古語では、「年頃」「月頃」「日頃」は同じような意味用法になり、副詞として用いられることが多い。

10わろく　「わろし」は「他と比較して劣る、基準以下の価値である」の意で、「よろし」の対。これに対して、「悪し」は「本質的に悪い、不快」だの意で、「よし」の対。

11物　対象として知覚・認識することができるもの全てを「もの」と言うが、ここは、

しているか、その内容に最も近い叙述の部分を抜き出せ。

答 向かひに立ちて、家の焼くるを見て、うちうなづきて、時々笑ひけり。（8〜9行目）

問 **「あさましきこと」（11行目）は、「あさましきこと」（7行目）とは言っている内容に違いがある。ここでは、どのようなことに対して言っているのか。**

答 良秀が、自分の家が燃えているのを平然と見て、笑みをうかべていること。

問 **「年ごろ」（12行目）について、**
[易]ここでの意味を述べよ。
[中]この言葉は、古語と現代語とでどのように意味が異なるか。

答 [1]長年の間　[2](古)　長い間。数年来。
(現)　適当な年配。

問 ●**「この道」（14行目）とは、何のことか。**

答 仏画を自分の専門の技芸とする道。

補 「道」は、学問や芸能などで、自分の専門とする方面のこと。

問 **「仏だに」（14行目）の「だに」は、次のどちらに該当するか。**
(ア)類推の副助詞。「…でさえ…まして…」の意。
(イ)限定の副助詞。「…だけでも」

答 (イ)

問 **「書きたてまつらば」（二〇・14〜二一・1行目）の「たてまつる」は、どんな敬意を表しているか。**

答 「仏」をお書きする、お書き申し上げるの意になるので、「仏」に対する敬意を表す。

補 敬意表現のうち、尊敬と謙譲とについて、「立ちたまへるぞ」などと対比して、現代語訳を通して学んでおく。

●二一ページ

問 **「わ党たち」（1行目）と同内容の語句を抜き出せ。**

答 とぶらひに来たる者ども

問 **「あざ笑ひ」（2行目）のここでの意味を述べよ。**

答 無能で俗物を惜しむ人々をばかにする笑い。

問 **良秀は、自分の家の焼けるのを、なぜ平然と見ていられたのか、この答えとなる良秀の気持ちを示している部分を本文中から書き抜け。**

答 これこそ、せうとくよ。この道を立てて世にあらんには、仏だによく書きたてまつらば、百千の家も出で来なん。（二〇・14〜二一・1行目）

問 **「その後にや、…人々、めで合へり。」（3行目）という結びの持つ余韻の意味を述べよ。**

答 時間的、空間的な次元を越えた芸術品を賞賛している。

畏怖・恐怖を感じ、忌避したい対象を、それと言い表すのを避けて、一般的な「もの」と表現する用法である。

12 なんでふ　どうして。なんで。「なにといふ」が変化した形。「物のつきたまへるか」と問われて、反発する気持ちを表す。

12 不動尊　不動明王。「明王」は、大日如来の命を受けて、一切の悪や煩悩を打ち破る諸尊のことで、五大明王（不動・降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉）・八大明王（諸説あって一定しない）などがある。「不動明王」は、忿怒の形相をして、大火炎を背負い、右手に降魔の利剣を、左手に羂索（索条）を持っている。

13 かうこそ燃えけれ　「かう」は「このように」の意の副詞「かく」のウ音便。「けれ」は詠嘆の助動詞「けり」の已然形。

14 世にあらんには　「ん」は仮定の助動詞「ん」の連体形。なんらかの場合を想定して、その場合は「…としたら」という意で用いる。

●二一ページ

1 出で来なん　「な」は強意（確述）の助動詞「ぬ」の未然形。「ん」は推量の助動詞「ん」の終止形。「なん」で、「きっと…だ

問　**この説話において、絵仏師良秀はどのような人物として描かれているか、簡潔にまとめよ。**

答　一芸（仏画）に魂を打ち込む一途な生き方をする人物。

ろう」の意。

1わ党たち　お前さんたち。

1させる能　「させる」は、指示副詞「さ」、サ変動詞「す」の未然形、完了の助動詞「り」の連体形が複合した連体詞。多く下に打消を伴い「これと言った、大した」の意。ただし、一説に「指す」の命令形＋「り」とする。類語に「さしたる」がある。

3その後にや、…　「その後にや」とあって、下にまた「今に」とあるために、文が乱れている感じになっている。「十訓抄」では、「その後にや、良秀がよぢり不動とて、人々めで合へりけり。」とある。

3よぢり不動　「よぢる」は、ひねるように曲げる意。仏画の不動尊の背後に描かれた火炎がよじったような曲線であったことから、このように名付けられたのであろう。

鑑賞

芥川龍之介がこの話を基にし、「古今著聞集」巻十一の「巨勢（こせ）の弘高、地獄変の屏風を画くこと」などにも取材しながら、王朝物の小説群の一作「地獄変」を書いたことはよく知られている。芥川は、この絵仏師良秀の姿に、あくまで表現に執する芸術家の運命を見たのであろう。あるいは、これほどに突き詰めた技芸への執心にたじろぐ芥川の内心がうかがわれると言うこともできよう。

「宇治拾遺物語」の本文には、良秀の名が「よぢり不動」の画風とともに語り継がれたとあるが、この話は他に「十訓抄」六の三十五に採られているだけで、他の資料には見られない。けれども、良秀の特異な人物像を見事に語り尽くしたこの話は、時を越えて読者の心に訴えかける力を持っている。

良秀の人物像は、主として、見舞いに来た人たちとのやりとりの中で描き出されているが、その背景として、「風おしおほひて」迫ってくる中で、「大路」の「向かひのつら」に立って、「煙・炎、くゆりける」我が家の赤々とした火炎に照らし出される良秀の異様な姿が聞き手に印象づけられていることが効果的である。その良秀と対置される良識的な人々の気遣いやとまどい・反発は、聞き手の側のそれと通じ合っており、火炎の照り返しで赤く染まった良秀は、その人々＝聞き手に向かって長口舌を振るうのである。

ところで、小説「地獄変」で、良秀が一人娘が焼き殺される火と知りながら、炎熱地獄のありさまに見入ってしまうのは芥川の創作であるが、この「宇治拾遺物語」の解釈においても、「衣着（きぬ）ぬ妻子（めこ）なども、さながら内にありけり。それも知らず」の箇所について、良秀が知っていながら放置したように解しているものが多いのは、いかがであろうか。その方向で読むと、本文中に書かれてはいないが、「妻子ども」は焼死したことになり、良秀は妻子を犠牲にしてまでも芸術に執した男になる。あるいは、いずれにしても妻子は焼死したかもしれないのだが、知っていて見殺しにしたとなると大違いなのであって、語り手が妻子の成り行きに全く関心を払わないこととしっくりしない。また、良秀が「火事だ」と知って家を飛び出したときには、火炎の姿に心を奪われていたわけではないのだから、芸術に執して妻子を顧みなかったことにはならないと思う。

「火事だ」と知って、取るものも取りあえず身一つで飛び出してしまうような男、だからこそ、振り返って見た火事の、自分が「わろく書きける」火炎の見事な実景に、たちまち心を奪われて他を顧みない男、そのような人物として良秀は描かれていると思われるのである。